（別紙２）

審査の結果の要旨

論文題目「境界をみつめる目――ナボコフのロシア語作品をめぐって」
氏名　　毛利公美

本論文は、ロシア語・英語の二か国語で執筆したロシア出身のバイリンガル作家、ウラジーミル・ナボコフ（1899-1977）について、その前期のロシア語作品に焦点を当て、亡命ロシア人コミュニティの社会的背景を視野に入れたうえで作品のテキストの緻密な読解を試み、この亡命ロシア作家が切り拓いた芸術的手法やその背後にある世界観を解き明かそうと試みたものである。

すでに膨大な先行研究の蓄積があるナボコフ研究に新発見や創見を付け加えることは容易ではないが、毛利氏は序章において最近の研究動向を英語文献・ロシア語文献の両方にわたって的確に整理したうえで、第 1 章でナボコフの最初期の作品に見られる「彼岸」思想に着目し、それを出発点にして、その後の本論において独自の視点を明確に打ち出すことに成功した。

本論文の独自の成果として高く評価できるのは、主に以下の 3 点である。

第 1 に、写真・映画・演劇といったジャンルとのナボコフの関わりを第 2～第 4 章で章ごとに順次論じたうえで、最後の第 5 章ではそれらの論を総合するように、長編『断頭台への招待』で主人公を取り囲む３つの異なる次元の壁の問題へと展開した。この論の流れを通じて鮮やかに浮かび上がるのは、現在と過去、現実と虚構、舞台・スクリーンと客席、現世と彼岸などの間にある様々な「境界」を凝視し、それを作品構造の中に組み入れたナボコフ独自の創作方法である。

第 2 に、本論文はナボコフの創作を亡命ロシア社会の具体的な場に置いて検討しており、亡命ロシア人の映画産業との関わりや、写真に対する亡命ロシア人作家たちの様々な態度といったあまり研究されていない側面を取り上げ、分析している。

第 3 に、これまでのナボコフ研究で注目されることの少なかった詩・戯曲などのジャンルの作品も積極的に扱い、ナボコフの文学技法や世界観を総合的に解明するための新しい知見をもたらした。

これらの点は、疑いもなくナボコフ研究に対する重要な学術的貢献であり、国際的にも注目されるべき創見を多く含んでいるが、それだけではない。本論文は、文学作品のテキスト分析という作業を亡命ロシア社会のコンテクストと有機的に結びつけることによって、亡命文学研究に新たな地平を切り拓き、さらには 20 世紀前半に急速に発展しつつあった視覚芸術の文学との関係という大問題を考察するための重要な手掛かりを与えるものでもある。

論文審査においては、文献・人名表記の不統一といった形式的な側面から、「彼岸」思想の理解、写真・映画・演劇との関係を論ずる際の理論的枠組みといった思想的・方法的な側面まで、改善すべき点、さらに慎重な検討を要する点等が指摘された。しかし、それらの指摘は本論文の豊かな内容と鮮やかな独創性を損なうものではない。それゆえ審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位にふさわしいとの結論に至った。